

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720209

研究課題名（和文）韓日の相手国民に対するイメージを測定する尺度の開発

研究課題名（英文）Development of a Scale of Mutual Images between Korean and Japanese People

研究代表者

呉 正培（OH JEONGBAE）

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：60510568

研究成果の概要（和文）：まず、日本人大学生に対する質問紙調査を通して日本人の韓国人イメージを構成する 5 因子を抽出し、各イメージの形成に関する因果モデルを構築した。次に、韓日大学生の相手国民に対するイメージを比較し、両者の接触場面で生じる誤解を明らかにした。その後、両イメージの仮尺度を作成し、質問紙調査を通して韓日の相手国民に対するイメージ尺度（日本人イメージ 25 項目、韓国人イメージ 31 項目）を導き出した。

研究成果の概要（英文）：First, an inventory survey on images of Korean people was conducted among Japanese university students. 5 factors of the Korean images were extracted and the casual model about formation of each image was built. Next, I compared the Korean images held by Japanese university students with the Japanese images held by Korean university students. Some misunderstandings which arise in contact scene of both were clarified. Then, I made the temporary scales of both images respectively. In order to examine the validity of the temporary scales, inventory surveys were conducted. As a result, the Japanese image scale (25 items) and the Korean image scale (31 items) were derived.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：日本人イメージ・韓国人イメージ・尺度

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会心理学の対人認知研究（Brewer, 1988；Fiske&Neuberg, 1990）はわれわれが他者を判断する際に個人の特徴に基づく情報処理よりも相手が属する集団の特徴に基づく情報処理を行いやすいことを明らかにした。ステレオタイプ研究では、集団として

の捉え方を個人に適用することは、個性を考慮せずに他者を画一的に捉えてしまう危険性を伴うことが指摘されている（上瀬, 2003）。これらの社会心理学の知見は、特定の外国人集団に対するイメージが先入観として働き、当該外国人との対人コミュニケーションを阻害しうることを示唆している。

(2) 本研究は、韓国人と日本人の相手国民に対するイメージが両者の接触場面に与える否定的な影響に注目し、両者の接触場面で用いられやすい先入観を把握するためのツールを開発するものである。

2. 研究の目的

(1) 韓日交流の主角を担う、両国大学生の相手国民に対するイメージの実態と形成メカニズムを明らかにした上で、韓日間のコミュニケーション・ギャップを解明するためのツール（イメージ尺度）を作成することを目的としている。

(2) 具体的には、韓国人の日本人イメージと日本人の韓国人イメージの構造を詳細に記述し、因果モデルを構築することと、両イメージを測定する尺度を開発することである。

3. 研究の方法

日本人イメージと韓国人イメージそれぞれに対する3回の質問紙調査（内容・形成要因調査、構造調査、尺度抽出調査）を実施した。そのうち日本人イメージの内容・形成要因調査と構造調査、韓国人イメージの内容・形成要因調査は2010年度4月時点で終わっており、2010～2011年度に行ったのは次の3調査である。

(1) 韓国人イメージの構造調査

内容調査で導き出した韓国人イメージ(24カテゴリー)の構造を明らかにするために、質問紙調査を行った。調査は2010年7～8月に日本の5大学で実施し、621名のデータを分析の対象としている（有効回収率95%）。因子分析と回帰分析を用いて韓国人イメージを構成する因子を抽出し、各イメージの形成に関する因果モデルを構築した。

(2) 日本人イメージの尺度抽出調査

2009年度までの研究で明らかになった日本人イメージを構成する5因子に基づき、出現頻度の高かった自由記述項目で仮尺度（40項目）を作成し、尺度を抽出するための質問紙調査を実施した。調査は2011年11月に韓国の6大学で実施し、661名のデータを分析の対象とした。回答者の評定に対して因子分析を行い、最終的に、25項目で構成される日本人イメージ尺度を見出した。

(3) 韓国人イメージの尺度抽出調査

構造調査より明らかになった韓国人イメージを構成する5因子に基づき、出現頻度の高かった自由記述項目で仮尺度（40項目）を作成し、尺度を抽出するための質問紙調査を実

施した。調査は2011年12月に日本の7大学で実施し、654名の回答を分析の対象とした。40項目の評定に対して因子分析を行い、最終的に、31項目からなる韓国人イメージ尺度を導き出した。

4. 研究成果

(1) 日本人の韓国人イメージの構造と形成メカニズムを明らかにした。日本人の韓国人に対するイメージの根底に「気さくな隣人」「熱い表現者」「想い強き者」「反日家」「有能な勤勉者」の5つの視点が存在することを浮き彫りにした。これらのイメージは韓国人との接触場面で用いられやすい先入観といえる。また、イメージ形成の因果モデルより、「気さくな隣人」「熱い表現者」のイメージは韓国製の映像（映画、ドラマ）と直接経験（韓国人との接触、滞韓経験）から、「反日家」「有能な勤勉者」のイメージは日本のテレビ報道から形成されることが示された。

(2) 韓日間の対人接触で生じうる誤解を予測できた。上記(1)の成果を韓国人の日本人イメージ（「侵略者・支配者」「気遣う原則主義者」「自己表現者」「非自己開示者」「働き者」の5視点）と比較したところ、両者の接触場面で次のような誤解が生じやすいことがわかった。

① 相手国民に対する反感が両者に必要以上の緊張感と過度な警戒心をもたせる。韓国人の日本人に対する過去の「侵略者・支配者」としての否定的な認識、日本人の韓国人に対する自分たちを嫌う「反日家」としての否定的な認識は、両者の接触場面で不安や不信感を助長し、相手のポジティブな面を発見してもその真実性を疑ってしまうことが考えられる。

② 対人関係のあり方に関する認識が、過度に一般化され、相手に対する判断を歪める。韓国人が日本人を常に一定の距離を保つ存在（「気遣う原則主義者」「非自己開示者」）として捉えているのに対し、日本人は韓国人を積極的に距離を縮める存在（「気さくな隣人」「熱い表現者」）として認識していた。対人関係のあり方に関する認識は、相手との接触場面で異文化知識として働き、相手の行動を理解する手助けとなる一方で、先入観として作用し、相手に対する正しい理解を妨げる原因ともなりうる。

(3) 社会的に共有されている偏見の存在と外国語学習が当該外国人に対する偏見の低減に寄与する可能性が確認された。日本人イメージと韓国人イメージの因果モデルを比較検討したところ、「侵略者・支配者」とし

での日本人イメージと「反日家」としての韓国人イメージはともに自国の学校教育とテレビ報道を通して形成されており、社会的にかなり広まっていることが推測される。両イメージは否定的な内容であり、それぞれ韓国社会と日本社会に共有されている相手国民に対する偏見ともいえる。また、因果モデルより、日本語能力の高さ（韓国語能力の高さ）が情報源としての学校教育とテレビ報道への依存度を下げ、間接的に「侵略者・支配者」イメージ（「反日家」イメージ）の弱化につながるといったプロセスが示された。外国語学習が情報源の多様化を促し、結果的に当該外国人に対する偏見を低減させる可能性が示唆された。

(4) 韓国人の日本人イメージを測定する尺度（25項目）と、日本人の韓国人イメージを測定する尺度（31項目）を作成した。両尺度を構成している項目を表1～2に示す。

表1 日本人イメージ尺度の構成項目

因子	項目
侵略者・支配者 ($\alpha = .866$)	自国民優越主義 ずるい 歴史を歪曲する 残忍 猟奇的 利己的 変人
気遣う原則主義者 ($\alpha = .794$)	親切 配慮する やさしい 礼儀正しい 迷惑をかけることを嫌う 秩序を守る
自己表現者 ($\alpha = .643$)	自由奔放 開放的 個性が強い
非自己開示者 ($\alpha = .741$)	親しみにくい 近寄りがたい 冷たい
働き者 ($\alpha = .794$)	無駄遣いをしない 節約精神が強い 質素 勤勉 仕事や学業に熱心 誠実

項目は因子負荷量の高い順。
アルファ因子法. プロマックス回転.
5因子の累積寄与率は42.5%.
4件法 (1 そう思わない～4 そう思う).

表2 韓国人イメージ尺度の構成項目

因子	項目
気さくな隣人 ($\alpha = .798$)	やさしい 明るい 親切 肌がきれい 情が厚い 美人が多い
熱い表現者 ($\alpha = .753$)	はっきり言う 積極的 自己主張が強い 感情的 熱狂的 うるさい
思い強き者 ($\alpha = .657$)	目上の人を敬う 家族を大切に 上下関係を厳しい 愛国心が強い
反日家 ($\alpha = .957$)	反日感情が強い 日本人にライバル意識 日本を敵対視 日本人が嫌い 日本が嫌い 日本をライバル視 日本に対抗心 日本人に恨み
有能な勤勉者 ($\alpha = .809$)	勤勉 頭がいい 勉強熱心 努力家 器用 まじめ 英語が上手

項目は因子負荷量の高い順。
アルファ因子法. プロマックス回転.
5因子の累積寄与率は49.5%.
4件法 (1 そう思わない～4 そう思う).

(5) 韓日間の相互イメージの実態とその形成メカニズムを具体的に記述した本研究の成果は、両国民間の接触場面で先入観として作用しやすい認識は何か、またその認識がどこから形成されるのかについての情報を提供し、両者の対人コミュニケーションにおける相互理解の促進に貢献できると思われる。また、本研究で導き出した韓日の相手国民に対するイメージ尺度は、今後韓日の相手国民に対する認識がどう変化していくのかを検討するためのツールとして用いられる。なお、独自の内容調査から尺度作成に至るまでの本研究の手順は、今後の外国人イメージの尺度開発研究にも大きな示唆を与えるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 吳正培、日本人大学生の韓国人に対するイメージの構造分析、韓国日本学会、23年2月12日、漢陽女子大学(韓国)
- ② 吳正培、日本人大学生の韓国人に対するイメージ：韓国語学習者と非学習者の比較、異文化間教育学会、22年6月12日、奈良教育大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吳正培 (OH JEONGBAE)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：60510568

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：